

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

土司文物の資源化と歴史展示のポリティクス：
干崖土司，刀安仁を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 清 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008638

土司文物の資源化と歴史展示のポリティクス

— 干崖土司, 刀安仁を事例として

長谷川 清

文教大学

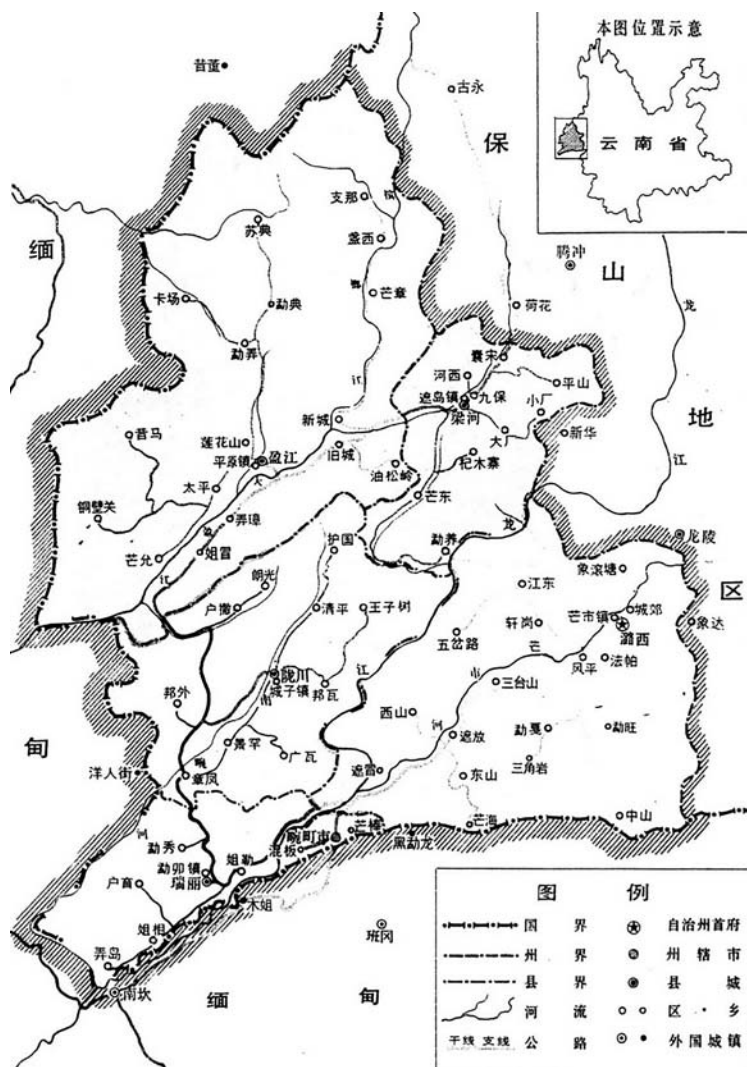
1 歴史の資源化をめぐる課題

歴史は集団のアイデンティティ形成や正統性の確立において重要な役目を果たすとされている。多くの歴史的過去の中から、その集団にとって象徴的な出来事や伝説、歴史の人物が選び取られた後、解釈や評価をふまえて叙述の作業が進行するが、為政者やエリート、歴史研究者、民間人など、多様な主体による思惑や意図も込められていく。こうした意味からすれば、歴史はアприオリに存在している過去ではなく、過去の無限数の素材の中から選び取られ、操作的に再構成、構築されるという性格を帯びている。

こうした視点からのアプローチは、中国の諸民族を対象とした民族史や文化史を考察していく場合にも有効であろう。周知のように、今日ある「統一的な多民族国家」としての中国では、19世紀末から20世紀初頭において、華夷秩序を理念とする歴代王朝の統治体制から、帝国主義への危機感や植民地化への対応、抵抗を契機として、中華ナショナリズムの台頭と軌を一にして「民族」の集団カテゴリーや自己意識が創出されてきたからである。

歴史を資源化の対象として捉えてみると、資源に対する操作性をめぐる問題があげられよう。集合的記憶や歴史的過去を選択して脚色や加工を施し、中国の全体史の中でどのように位置づけていくのか。「物語」や「記憶」を語る主体は誰であり、誰が「解釈」を行なうのか。歴史上の英雄的な人物の事績は誰によって「評価」され、誰に向けて「呈示」されるのか。とりわけ少数民族については、「民族」の歴史やアイデンティティがいわば後追いの形で創り出される場合も多かったと思われる。中華人民共和国の成立以後、国家の側からの「民族」認定の作業によって集団カテゴリーが最終的に確定し、公式に「民族」としての政治的地位を得るに至っている。

少数民族における歴史の資源化は、民族としてのアイデンティティ形成に直接に関係している点が指摘できる。それは民族政策の根幹にかかわり、自治区や自治州、自治県などのローカルな政治において争点となったばかりでなく、「民族」の歴史を書くという行為をめぐる国家と当該の民族集団の関係が焦点化された。どのような歴史的過去を取捨選択し、公式の歴史として叙述していくかは民族政策の実施にかかわる為政者やエ



地図1 德宏タイ族ジンポー族自治州
(出所) 德宏傣族景颇族自治州概況編写組 1986



写真1 盈江盆地 (2016年8月, 筆者撮影)。



写真2 新城(盈江県) (2016年8月, 筆者撮影)。

リートの側に課せられた必要不可欠の課題となったのである。本稿が対象として取り上げる中国周縁部の国境地域にある民族集団のばあい、こうした観点をふまえて、歴史の資源化を検討していく必要がある。

以下、本稿では、清末から民国初期に活動した刀安仁（1872-1913年）の事績と再建された「刀安仁故居」について、現地調査で得たデータや知見をもとに考察を行う。刀安仁は雲南省徳宏タイ族ジンポー自治州の盈江県（当時の行政単位では干崖）の出身であり、タイ族の土司出身の政治エリートとして傑出した人物である。刀安仁故居は干崖土司の衙門を修復した建築物であり、刀安仁の事績を中心とした歴史を展示する記念館としての性格をもち、干崖土司や刀安仁に関連する文物資料が展示されている。刀安仁は、国境地域の統治にかかわったタイ系民族の土司の中で、孫文の中国同盟会に参加し、辛亥革命の展開とも深くかかわっている。この点において、彼の事績が今日中国においてどのように評価されているかを検討することは、本プロジェクトの進展に対しても有益な視点を提供することができるように思われる¹⁾。

2 歴史文化資源としての土司文物

歴史上、西南中国には土着のエスニック・リーダーとしての多様な土司が設置されてきた。しかし、王朝側は、土司を廃止し、中央政府によって派遣された流官が治める直接統治の体制（改土帰流と呼ばれる）へと転換を図っていく。かくして清代以降には多くの土司が消滅した。民国期まで存続できた土司は限られている。タイ族やチワン族、四川省のチベット族などはその代表例と言える。

辺境地域にあって華夷秩序を守りつつ、少数民族地域において朝臣としての役目を果たした土司が中華ナショナリズムの台頭にもない、従来の封建的な権力体制とどのような距離を持ち、あるいは中国革命とどのようにかわり、どのような功績を残したのかという問題は、それ自体、歴史研究の対象としても重要であるが、土司制度をいかに評価するかは複雑な政治的問題でもあった〔江応樑 1992〕。

こうした状況からの脱却が図られるのは近年のことである。2000年代に入って、「中華民族」としての文化遺産という視点から、「土司文化」に関して学術シンポジウムが開催されるようになった点は注目すべき動きの一つであろう。前近代において存在した多様な土司を遺産として歴史的意義に対して一定の評価を与えるようになってきたからである。徳宏地区のタイ族土司には南甸、干崖、隴川、盞達、遮放、芒市、勐卯があった。その大半は、明代の洪武年間の沐英による麓川征討、あるいは正統年間の王驥による「三征麓川」と呼ばれるムンマオ王国に対する軍事的鎮圧に参加し、それにおいて功績を立てたことが土司設置の起源となっている〔中国人民政治協商会議他（編）1997〕。

1885年のビルマの植民地化以降、国境画定を契機に、雲南省西部に対するイギリスの進出は活発化した。政治的な帰属や国境意識が薄弱であった雲南・ビルマ境界の諸民族は「辺民」とみなされた。中国周縁部で「辺境の危機」が露呈し、国防の重要性が認識されると、「辺民」を「中華民族」として組織化することが民国政府の政策課題となった。それまでの華夷秩序と王朝支配の政治文化体制のもとで保持されてきた土司制度も疑問視され、こうした状況の中で、タイ族土司の自己意識も改変を迫られることになった。中華民国期に6つの設治局がおかれ、宗教信仰、教育、風俗の改良が目標となった。しかし、実情は土司と流官の二重統治体制であった。日中戦争の激化に伴い、国境地域の防衛にも寄与させるべく、土着の政治権力を存続させる方針が採用され、その権力体制は存続された²⁾。

土司権力のシンボルとしての土司衙門その他の建築物の保存は必ずしも十分とは言えない。多くの土司遺跡は破壊されたままになっているか、保存が十分になされていない状況にある。タイ族に関していえば、車里土司が置かれていたシーサンパンナの場合、王宮の建築物（土司衙門）はすべて破壊されている。これに対し、孟連土司、南甸土司はもっとも完全な形で保存されているが、徳宏地区のタイ族土司の土司建築で残存するものは地方衙門の建築形式であり、中国的な特色を備えている。タイ語で「宮殿」を意味するホーハムと呼ばれている点においてはタイ系諸族と共通である。干崖土司の場合、再建や復興の対象になっている点で注目に値する。

3 干崖土司と刀安仁

徳宏地区のタイ族土司は自らの祖先を漢族とする伝説を有する。すなわち、江西、南京、四川重慶などの内地地方から移住したとされ、その漢字の「姓」は王朝より賜ったものとし、家譜を持つのである。干崖土司の場合、初代から第26代までで547年の歴史があるが、その家譜において原籍は南京にあると伝えられてきた。明代の洪武年間、鄒忠国は沐英の南征に従い、その功績により加封され、「刀」姓を賜ったとされている〔吳志湘・王清永 1997³⁾〕。

干崖土司の歴史展開において他の徳宏のタイ族土司との大きな違いは、辛亥革命の進展に寄与した刀安仁の事績であろう。刀安仁は同治11（1872）年、第23代土司・刀盈廷の長子として生まれた。幼少より中国文化の薫陶を受けて育ったが、光緒17（1891）年、宣撫使を世襲した。

当時、雲南を取り巻く国際環境は、イギリスやフランスによる東南アジア諸地域の植民地化が進行し、干崖へもイギリスの勢力が迫ってきていた。刀安仁は配下に従える人々を組織してイギリス軍に抵抗するなど、国境地域の政治的リーダーとしての頭角を現したが、インドやビルマにも赴き、自らの見聞を広めた。そうした中で、清朝を倒すため

の革命活動を行っていた秦力山と知り合い、その支援によってラングーンに赴き、1906年日本に留学した。孫文、宋教仁らとも交遊し、中国同盟会に加入したが、財政面で中国同盟会の活動に大きく貢献したのである。また、南洋を訪れた際、ゴムの苗木を導入した。1908年には干崖に戻り、地域の近代化に取り組み、印刷所や貨幣製造所を建設した。張文光、劉輔国らとともに、騰沖を拠点に、革命組織自治同志会を発足させた。1911年9月6日、騰越起義を指導し、滇西国民軍都督府を発足させ、滇西国民軍都督府第二都督に任じられた。しかし、袁世凱の中華民国政府によって逮捕され、投獄される。出獄した後、陸軍部咨議になったが、1913年、北京で病死した。孫文はこれを知り、「邊塞偉男、辛亥拳義冠遇春、中華精英、癸丑同働悲屈子」という題書を贈り、その功績を讃えたのである。北京政府は彼に上將軍銜を授与し、榮譽を称えて盛大な追悼会を挙行了。同年5月、刀安仁の遺体は干崖に護送され、新城郷鳳凰山に葬られた。

以上のように、刀安仁はその短い生涯の間に、卓越した少数民族出身のエリート、政治的リーダーとして、植民地主義への抵抗、外国留学、地域の近代化への取り組みや革命運動への直接的な関与など、当時の雲南辺境においてタイ族土司が一般に属していた封建的状況やその文脈から意識的に離脱し、激動の歴史にかかわっていくのである⁴⁾。



写真3 刀安仁 (2016年8月, 筆者撮影)。



写真4 刀安仁関係の書籍 (2016年8月, 筆者撮影)。



写真5 刀安仁陵园入口 (2016年8月, 筆者撮影)。



写真6 刀安仁墓 (2016年8月, 筆者撮影)。



写真7 刀安仁の事績を刻んだ碑文 (2016年8月, 筆者撮影)。

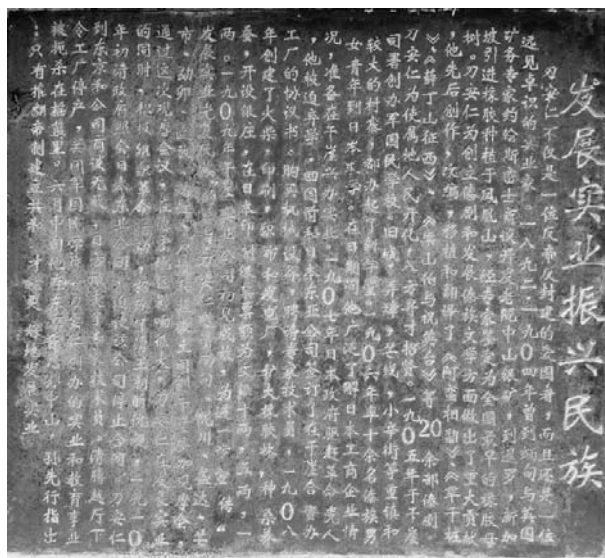


写真8 刀安仁の事績を刻んだ碑文 (2016年8月, 筆者撮影)。

4 刀安仁の事績に対する評価

刀安仁については、卓越した少数民族出身のエリート、政治的リーダーとして近代中国において果たした歴史的意義や民族主義、愛国主義への貢献などが高く評価され、社会的にも認知されている [謝本書 2008; 曹成章 2010]。刀安仁の事績は、中国の政治的

状況が変転していく中で、どのように評価されてきたのであろうか。

2000年代以降、『刀安仁伝略』[刀安禄・李順才・楊広生 2001]、『刀安仁伝』[張明耕 2004]、『民主革命先駆刀安仁』[曹成章 2010] など、関係書籍が続々と刊行されている。また、テレビでの放映や舞台芸術化、映画化も行われている。後者については第25回中国金鶏百花電影節（2016年9月26日、唐山電影城）において新作映画として発表された点が注目できるが、以上はすでに中国における歴史的評価が確定し、様々なメディアを介して中国社会に共有化されていっていることを意味している。

刀安仁に対する評価の経過をたどってみよう。同時期の歴史的出来事としては、マーガリー事件の方が多く言及されてきた。マーガリー事件は1875年、清朝とビルマの境界でイギリス駐華公使館員 A. R. マーガリー (Augustus Raymond Margery) が何者かの中国人に殺害された事件だが、干崖土司の管轄内で起きた。『傣族簡史』(1986年)には刀安仁という名前や彼の事績についての記述はないが、マーガリー事件は詳しく言及されている [《傣族簡史》編写組 1986: 119-120]⁵⁾。

これは、封建領主制度として退けた土司制度の側にあった歴史人物をどのように評価するかに関して、中国共産党の階級闘争史観の枠内において評価が難しかったことを意味するのかもしれない。しかし、民族区域自治が復活し、民族自治州としての発言力も増す中で、徳宏タイ族ジンポー族自治州の歴史叙述の作業において彼の事績の意義が強調されていく。1986年に刊行された『徳宏傣族景頗族自治州概況』では、刀安仁の事績が詳しく紹介されている [《徳宏傣族景頗族自治州概況》編写組 1986: 50-51]。近年では、タイ族を代表する「知名文化人士」[何少林・白雲編著 2012: 359]、「徳宏人物」[中共徳宏州委宣传部(編) 2013: 42]の一人として筆頭に紹介されている。

こうした意味からすれば、刀安仁は1980年代以降に評価が確立し、社会的な認知が広がってきた人物である。1980年代から90年代の動きとしては、いくつかの論文が著されている。その一つは、張天放「辛亥革命中の傣族愛国領袖刀安仁」が刀安仁の事績を紹介している。そこでは、辛亥革命において愛国的なリーダーとしてイギリス軍に抵抗した、辛亥革命に協力したなど、国境防衛に寄与したと評価されている [張天放 1985 (1981)]。曹成章「傣族的民主革命先駆者-刀安仁」も重要である。傣族の民主革命の先駆者と評価したことにより、刀安仁の評価が確立したとよい [曹成章 1985]。また、江応樑は『傣族史』において、辛亥革命との関係にふれ、刀安仁が孫文と連携した活動を行った人物として記述している [江応樑 1983: 413-416]。

この時期に、徳宏地区のタイ族知識人の間で関係資料を整理する動きが起きている点にも着目しておきたい。それは、『刀安仁年譜』[1984年、徳宏民族出版社]、『抗英記』[1985年、徳宏民族出版社]の2冊の刊行が挙げられる。これによって従来ほとんど知られていなかった刀安仁の事績の全体が展望できるようになり、中国革命の過程の中に位置づけることが可能となったのである [刀安禄・楊永生 1984; 刀安禄 1985]。

自治州の側でも歴史記述の対象に取り上げている。こうした記述にかかわったのは、自治州の文化行政や学術界で一定の影響力や発言力を持つタイ族知識人である。『徳宏傣族景頗族自治州概況』では刀安仁の事績を詳細に紹介し、彼を「愛国志士」と呼び、その「愛国行動」を高く評価している。彼はタイ族の愛国主義者であったが、長期にわたって彼の革命の事績が故意に埋没させられてきたことは極めて不公平な歴史事件であるとしている [《徳宏傣族景頗族自治州概況》編写組 1986: 413-416]。観光ガイドブックとしての性格を持つ出版物にも記述されている。『徳宏風采』[張承源・方華 1988]では「中国橡膠之母」という項目において彼の経歴を紹介し、1906年4月にシンガポールから輸入したのが中国におけるゴム栽培の歴史の一齣であるとしている [張承源・方華 1988: 57-60]。また、『徳宏大観』では「刀安仁 (1872-1913)」という項目が設けられ、彼の事績を紹介している [徳宏傣族景頗族自治州人民政府 (編) 1993: 106-107]。この書籍は徳宏タイ族ジンポー族自治州の歴史、民族、社会、文化、経済などを網羅的に扱ったガイドブックである。刀安仁の他に、龔綏 (1891-1969, 南甸土司)、多永安 (1911-1969, 隴川土司)、思鴻昇 (1893-1969, 盞達土司)、多英培 (1909-1969, 遮放土司) などのタイ族土司を紹介している⁶⁾。

1980年代から90年代は、刀安仁の事績が徳宏タイ族ジンポー族自治州のタイ族知識人によって公式の歴史に復権を果たした時期として捉えることができよう。そして、この時期には刀安仁の墓が文物に指定されている。すなわち、1987年に盈江县政府によって県級の文物保護単位に指定されたが、その後、州級の文物に格上げされ、徳宏州文物保護単位 (1989年7月) となり、さらに省級の文物として第4期の雲南省の重点文物保護単位 (1993年11月) となった。雲南省政府は1994年から再建に着手し、工事は1996年に完了した。こうして現在ある形状の墓 (高さ3.2メートル、長さ3.741メートル、幅4.4メートル) となったのである。その際、刀安仁の事績に関する2つの碑文、「拳義旗献身革命」碑 (写真7) と「發展実業振興民族」碑 (写真8) が作成されたが、孫文が刀安仁に贈った題書にある称号も刻まれており、文物としての価値を高めている⁷⁾。

2000年代に入ると、前述したような関連書籍が刊行され、中国社会での認知度を高めていく。それを決定的にしたのは、2009年に中国政府が取り組んだ辛亥革命100周年にちなんだ記念活動である。各種のイベントが中国各地で展開されたが、雲南省の状況も同様である。こうした中で、中華民族の復興、愛国主義、民族主義の高揚の手段として刀安仁の事績は無視できないばかりか、格好の題材でもあった。

2009年4月9日、澆水節の開催にあわせて雲南省傣学会、徳宏州人民政府、盈江県人民政府などが共催する形で、シンポジウム「首屆刀安仁革命思想学術研討会」が盈江県で開催された。それは刀安仁革命思想をテーマとした学術討論会であり、民主革命を核心に据え、愛国主義の称揚を主旨としており、彼の思想と行動を多方面から検討するという企画であった。数多くの論文が発表された。刀安仁の事績を吟味しつつ、「民主革命

思想」[孟必光 2010], 「革命思想」[刀安鋸 2010], 「刀安仁精神」[張国龍 2010], 「民族精神」[俄吞 2010] などが特に、主要な論点や検討内容となり、シンポジウムに参加した人々によって議論されたのである。それは、刀安仁の事績をめぐる評価を確定することでもあった。寄せられた多数の論文は刀安仁の事績に言及し、今日の中国社会や自治州が直面する様々な課題に対して先見的である点を評価しており、偉大な事績と称揚する点で共通している⁸⁾。

ここではその一例をあげておく。長く自治州の州長を務めた刀安鋸は、刀安仁の愛国主義と革命精神の特徴を「6つの第一」として総括する。すなわち、以下の6つの功績である。

①刀安仁は士兵を組織してイギリス軍に抵抗したが、地形を巧みに利用したゲリラ的な戦術、鏡による光の反射を使った味方同士との連絡方法を用いて彼らに打撃を与え、8年間を戦い抜いた（「辺境抗敵第一人」）。②封建制度に反逆し、東南アジア諸国やインドを視察した。さらに遊学先のラングーンで丘仁恩、庄銀安、徐賛周、陳甘泉らと交流し、秦力山の革命思想に接した後は帰郷して滇西起義を組織することを決意した（「探求進歩第一人」）。③マレーシアでゴムの苗木を購入して持ち帰った（「引種橡胶第一人」）。④土司として初めて海外留学を果たした開明の人士であった（「留洋土司第一人」）。⑤少数民族として最初に中国同盟会に加入した人士であり、孫文の革命事業に様々な支援と協力を惜しまなかった（「最先加入同盟会的少数民族第一人」）。⑥騰越起義を指導、滇西国民軍都督府が発足し、滇西国民軍都督府第二都督に任じられた（「革命軍都督少数民族第一人」）。

また、革命思想に対する評価としては、以下の8つの側面を指摘する。封建領主制度への反逆、中国同盟会への加入、イギリス帝国主義への抵抗、教育振興と人材育成による民族の復興、各種の技術の導入と実業への取り組み、騰越起義の指導、タイ劇の改革と発展、女性解放と男女平等の立場による女子留学の実現。そして、辺境の偉大な男子、中華のエリートであり、中華民族の優秀な息子であり、タイ族人民の誇り、徳宏各族の光栄であると結んでいる [刀安鋸 2010: 8-23]。

5 歴史展示のポリティクス

5.1 刀安仁故居の修復

盈江県（干崖）にある刀安仁関係の史跡は、①彼によって導入された中国最初のゴムの古木及び諸施設（写真13、14）、②刀安仁墓（写真5・6）、③復元された干崖土司の衙門建築である刀安仁故居（写真9・10・11・12）の3件である。いずれも盈江県の新城郷に位置し、鳳凰山（龍脈とみなされる）を背にして檳榔江をのぞむ形勢となっている。その配置には風水の考え方が反映されている。

以下、再建された刀安仁故居を中心にみていこう（以下、土司衙門とする）。長期に及ぶ統治体制のもとで、土司内部の権力争いなどの理由によって、土司衙門は移転が繰り返されてきた。清代以降はいわゆる伝統的な官衙建築であり、康熙31（1692）年に建設が始まった。大堂、二堂、三堂、四堂及び両側に廂房があるとされる。土司官署の内部機構は「三班六房」である⁹⁾。今日の新城に移ったのは康熙元（1662）年である。しかし、その後も戦火に遭い、土司衙門は破壊された。その度に修復が行われたという。最後の土司衙門は1924年の干崖で起きた戦火によって破壊されてしまい、第24代土司の刀保図（別名、刀京版）が修復を手がけたが、1950年5月、干崖が解放された時、一部分が残されているのみだった。文化大革命の期間中にも荒廃が進んだ。2008年の時点で残存していたのは、二堂、三堂、3つの廂房だけであった。

2007年、修復工事が始まった。修復にあたり、盈江県政府では県長を組長とする「刀安仁故居景点開発建設領導小組」を組織した。歴史的景観を尊重し、最大限に歴史的建造物のかつての姿を復興することが課題とされた。その際、再建における新築部分と修復部分を組み合わせることにした。



写真9 刀安仁故居（2016年8月、筆者撮影）。



写真10 刀安仁影像（2016年8月、筆者撮影）。



写真11 刀安仁故居の正堂（2016年8月、筆者撮影）。



写真12 刀氏一族の位牌（2016年8月、筆者撮影）。



写真13 刀安仁が招来したゴム樹 (2016年8月, 筆者撮影)。



写真14 ゴム樹記念館 (2016年8月, 筆者撮影)。

木材の部分(非恒久的な建材)とレンガ、石材(恒久的な建材)をどのように調和させるかが考慮されたが、記念建造物および遺跡の保全と修復のための国際憲章(ヴェニス憲章)を参照した。すなわち、歴史的建造物を補充する必要がある場合、新しく建てる部分には現代的な風格を持たせるという点に配慮し、さらに新城郷小鎮の総合開発と結びつけることにした。刀安仁墓、鳳凰山森林公園、橡胶母樹(ゴム樹)記念館、報国寺、大仏寺などを結びつけ、観光をねらいとした小城鎮(旅游文化小鎮)を建設したのである[鄭光永 2009]。

封建領主の象徴とされる土司衙門の修復は、政治的にも困難が伴う場合が多い。南甸土司のように原物が保存されている場合を除き、徳宏地区では破壊されたままになっている。こうした状況と比べれば、刀安仁の事績が高く評価されているという点は有利であるが、しかし干崖土司衙門の復元ではなく、刀安仁故居として指定を受けている点に注目すべきである。

5.2 歴史展示

刀安仁故居は土司衙門の単なる修復ではない。それは、彼の事績を中心に、干崖土司及び盈江県の解放までの歴史を展示する記念館としての位置づけである。入口の大門を入ると、建物に囲まれた広場の空間がある。そこには刀安仁のモニュメントが造られている。こうしたモニュメントによって、回想すべき刀安仁の事績とそれを展示する「記憶の場」としての役割を持たせており、刀安仁故居という名称と機能を合致させている。刀安仁がイギリスに抵抗した英雄的な行為、民主革命の活動、実業開発、民族復興の功績などを展示し、刀安仁の愛国主義思想と革命精神を伝承していく愛国主義教育基地としても活用し、民族意識の発揚や地域文化の発展に寄与するための文化装置とされているのである。

展示の特徴は、土司衙門の建築物に刀安仁の事績を配置する形式をとっている点であるが、これ自体に目新しさはなく、時期ごとに刀安仁の事績を土司衙門の構造に配分し、



写真15 展示物(土司文物) (2016年8月, 筆者撮影)。



写真16 土司の儀仗 (2016年8月, 筆者撮影)。



写真17 展示物(刀安仁の日本留学) (2016年8月, 筆者撮影)。



写真18 タイ劇の衣装 (2016年8月, 筆者撮影)。

歴史を展示する。トピック、テーマごとに、コーナーを設けて説明している点が特徴であるが、説明に使われるのは漢語のみである。大型の文字パネルには、①前言、②八年抗英 抵御外侮(8年間のイギリス軍への抵抗, 外国の圧迫に抵抗する)③追求光明 探索真理(光明を追求し, 真理を探索する), ④傣劇簡介(タイ劇の紹介), ⑤騰越首義 浩氣長存(初めての騰越起義, 気高い精神は永遠にある)の5つである。

土司の文物(歴史資料)には墓, 官署, 所持品, 家譜, 衣服, 印璽, 旗などの他, 文献資料があるが人物写真の複製や文物の写真パネル, 絵画の形式(写真15, 17)が展示物の大半を占め, 実物は少ない¹⁰⁾。土司の儀仗(写真16)や刊行された刀安仁関係の書籍(写真4), タイ文字の仏教經典, 經典箱が展示されているが, 正堂には刀氏一族の位牌が中央に置かれている(写真11, 12)。

1) 前言

「前言」では, 刀安仁(1872-1913)の事績を概観しつつ, 彼が中国同盟会会員であり, タイ族におけるブルジョア民主主義革命(資産階級民主革命)の先駆者であり, 革命運動のリーダーの一人として騰越起義を成功に導いたとしている。そして, 刀安仁は反帝反封建の愛国者であるばかりでなく, 将来に対する展望と高い見識を有する実業家とす

る。その生涯は愛国の一生であり、自由と光明を追求する一生であった。そして、20世紀の傑出したタイ族の愛国民族資産階級革命家であり、盈江人民と郷土の誇りであるという説明を加えている。展示される写真パネルは次の7枚である。タイトルは、①刀盈廷（刀安仁之父）、②刀安仁、③帕克法（刀京版）刀安仁長子、④刀保固（刀安仁次子）、⑤刀保固（刀安仁三子）、⑥刀盈廷練功石、⑦刀京版練功石、である。

2) 土司制度

土司制度が元朝の時代に設置された後、明代に整備され、清朝へと踏襲された点に言及し、干崖土司は洪武3（1370）年に干崖千夫長に任じられて以来、1950年の和平解放までの580年間、干崖を統治し、23代27人の土司が継承してきたことなどを説明している。展示される写真パネルは次の9枚である。タイトルは、①騰越庁轄区図、②干崖土司任序表、③土司穿朝王服、④土司上京時觀見皇帝所穿的朝服長袖袍（金鏤）、⑤朝服、⑥干崖宣撫使司印（県檔案館）、⑦欽賜頭品頂戴双眼花翎記大功十五次、⑧土司保存的徽章、⑨牙片写経（県文管所）、である。

3) 八年抗英 抵御外侮

刀安仁が宣撫使を継承し、イギリス軍に対して行った8年間の抵抗の戦いの様子を18枚の絵画（組絵形式）によって紹介している¹¹⁾（写真19, 20）。光緒17（1891）年、刀安仁が第21代宣撫使を継承した時、イギリス軍がビルマとの境界であった鉄壁関（清朝側の軍事拠点）を越えて勐卡地方に侵入したことに對し、彼は朝廷に上奏すると同時に、500名あまりのタイ族、ジンポー族、リス族、漢族などの勇士を募って勐カの「頓哄罕」で兵站を築き、イギリス軍に對峙した。その際、鏡の反射を使って信号を送りあう「天光報信」の方式を採用したこと、山中に隠れてイギリス軍に襲いかかる「七里八護窩」



写真19 刀安仁の抗英活動（2016年8月，筆者撮影）。



写真20 刀安仁の抗英活動（2016年8月，筆者撮影）。

という戦術によって抵抗したことを紹介する。さらに、無力な清朝は西洋人に屈服し、鉄壁、虎踞、天馬、漢龍の下四関を割譲しただけでなく、刀安仁が率いる抵抗軍を解散させたことに、刀安仁は憤慨してタイ文字によって愛国の念を吐露した『抗英記』を創作したことなどが説明されている。3枚の写真パネルが使われているが、そのタイトルは、①刀安仁抗英時使用的単筒望遠鏡、②火薬槍、③清官刀、である。

4) 追求光明 探索真理

刀安仁は救国の道を探すために、ビルマ、インドなどを歴訪した。1905年、ビルマのラングーンで華僑の丘仁恩らと面識を得て、民主革命思想を知った。そして「拳兵演辺為己任」を決心した。干崖に戻ってから、軍国民学校を創設し、辺疆の有志を募った。同年秋、秦力山は刀安仁から招聘され、陳仲赫、陳守礼、李貞壯、陳仁和、謝玉兔らを引き連れて、革命活動のために干崖に来た。1906年2月、刀安仁は日本留学を実行した。同年5月31日、呂志伊の紹介により、東京で中国同盟会に入会した。1908年3月、ビルマに中国同盟会分会が成立した。1910年7月、ラングーン分会は刀安仁をリーダーとする同盟会の支部を干崖に作った。ここでは4枚の写真パネルと2枚の絵画パネルが使われている。絵画のタイトルは、①東渡日本、②同盟会、である。さらに展示ケースが2つあったが、何も置かれていない。

5) 傣劇簡介

タイ劇の歴史と特徴について説明している。タイ劇は盈江に発する。清朝の道光年間、タイ族の民間説唱、動唱、民間歌舞を基礎とし、皮影戲の表演形式を吸収し、タイ劇のひな形ができた。光緒9（1883）年、干崖土司署に徳宏の歴史において初めてのタイ劇班が作られたが、演劇、川劇の表演形式を吸収し、形が出来上がっていった。刀安仁は著述、収集、整理、改編、移植などを行い、多くの作品を創作したとしている。タイ劇の舞台道具と衣装も展示している（写真18）。

6) 騰越首義 浩氣長存

騰越起義に関して説明している。刀安仁は南洋に行つて孫文に会い、孫文から指示された滇西起義を準備し、ラングーンで呂志伊らと協議し、干崖に戻つて騰越起義の計画を立てるための会議を開いた。この会議に参加した人物の中には、張文光、劉輔国、蔣恩洲などがいた。刀安仁、張文光、劉輔国はそれぞれ任務を分担し、孫文の制定した「革命方略」に従い、騰越起義の準備を実行に移した。この間の経緯が説明されている。展示される写真パネルのタイトルは、①孫文像、②永昌起義主要領導人——楊振鴻、③刀安仁、④騰越起義主要領導人之一——張文光、⑤騰越起義主要領導人之一——劉輔国。また、タイトルはつけられていないが、⑥刀京版と毛沢東、⑦刀京版、⑧老人女性（刀京

版夫人か母一筆者)の3枚の写真パネルが展示されている。

6 考察

博物館や記念館における歴史展示は重要である。それは記憶の共有化の行為を操作する手段としての役割を果たし、一種の統合機能を有するからである。一般に、博物館や記念館などで行われる歴史展示は物語性を基礎にしており、それを如何にわかりやすく見る側に伝えるかが課題となる。こうした表象行為では、展示する側と展示される側、さらにその展示を見る側という3つの異なる主体がかかわり、展示の空間が構成される。3者のうちで、展示する側と展示される側の権力関係は均衡性を欠く場合が多いとされる。また、中華人民共和国の成立以前の歴史についての評価は、中国革命の展開あるいはそれとの距離によってその意義の有無が判断される。刀安仁に対する評価は、徳宏タイ族の間ではそれほど大きな変化はなかったが、中国社会の全体に対しては段階的に拡大してきたと言えよう。特に、大きな進展に関しては、辛亥革命100周年の記念行事の開催を契機としている〔潘先林・張黎波 2011〕。

辛亥革命というマクロな歴史記述において、それぞれに役割を果たした歴史人物やその事績、歴史文物、史跡などが総合され、トータルな評価基準から記述行為の客体になった。それは、素材としての歴史的過去から「民族精神」や「革命思想」をいわばエッセンスとして抽出する作業であった。刀安仁はその点で、模範的な素材であった。一般に、歴史展示は歴史を語る側が上位にある場合、物語化の形式はそれに独占されていくが、刀安仁の場合、タイ語で書かれた各種の資料があり、民間に伝わっている集合的記憶も対象に含まれている。例えば、イギリス軍との戦いに関するエピソードは中国側の文献史料には決して登場しないものである。

歴史展示において国家・ローカル関係の権力編成は展示を方向づけていく。歴史という物語(ナラティブ)に関して、参観者は、実際には孤立した個々の物語が並列されているにすぎない展示空間を、時間軸に沿って配列された展示室から展示室へと歩みながら、物語を読んでいくことになる。この点は、刀安仁故居でも同様の手法を採っている。雲南辺境の土司制度を背景にした少数民族のエリート、英雄的人物の事績を物語として提示し、しかも簡潔に見る側に伝えるには、工夫が必要である。その点において特徴とも言えるのは「八年抗英 抵御外侮」のコーナーであろう。イギリス軍との戦いを描いた18枚の絵を使って詳述している。刀安仁の事績は、いわば大画面の連環画のスタイルによって表示されているのである。これは見る側が子供を含めた一般人であり、彼らに理解しやすくするための工夫である。

刀安仁故居は愛国主義教育基地としての活用がなされている¹²⁾。中国において、愛国主義教育は1980年代ではあくまで共産主義者を育成するための手段の一つであったが、

1989年の天安門事件後、とりわけ1990年代にその重要性が認識された。2000年代に入ると、中華民族の振興、伝統文化の継承と発揚が強調されていく。

1990年代以降、中国各地では愛国主義教育基地が数多く指定され、その見学は政府によって奨励されるほか、青少年を対象にした愛国主義関連の書籍や曲目が推奨され、それに関するコンクールなどの活動が多数行われるようになった。

徳宏タイ族ジンポー族自治州の場合、雲南省政府は州内の愛国主義基地として以下の拠点を指定している。すなわち、馬嘉理事件発生地遺址、抗英民族英雄紀念雕像（以上、盈江県）、畹町中緬友好紀念館を「省級愛国主義教育基地」に指定した。州級の指定には、中国人民解放軍駐蹕西部隊烈士紀念碑、滇西抗日戦争紀念碑、芒市珍奇園の周恩来紀念亭（以上、芒市）、李根源故居（梁河県）、刀安仁墓、刀安仁故居（以上、盈江県）、民族英雄の早樂東雕像（隴川県）、戸瓦寨の景頗抗日自衛隊紀念碑、《有一个美麗的地方》創作基地（以上、瑞麗市）、などがある。刀安仁墓と刀安仁故居は愛国主義教育基地としてはブランド力を有していると言える。

7 おわりに

中華の周縁地域において外敵への抵抗に貢献したエスニック・リーダー（民族英雄）を表象する行為は、中華の伝統としての土司制度の評価を前提としつつも、中華（中国）ナショナリズムと接合している犠牲的精神の称揚や追悼式なども結びつけられることによって真正性を帯びる。刀安仁故居が単なる模造品でなく、歴史文化資源としてのブランド化に成功するか否かは、国家の側がメディアを活用して物語を演出することと並行してはじめて可能になる。こうした点において、刀安仁というブランドは孫文とのかかわりがあるという点で有用である。さらに、刀安仁の年譜、書き残した作品などの資源も重要な役割を果たしている。刀安仁の生きた時代、その他のタイ族土司は慣習的な世界に生きており、自己の思想の表明など、自らを表した作品は存在しない。しかし、刀安仁は別格の存在である。自らの心情を綴った『抗英記』という文芸作品を有するからである。彼の事績は文芸化の対象に取り扱うことができ、事実、映画やテレビドラマでも取り上げられるようになっている。刀安仁故居はそうした物語行為に対して聖地、巡礼先としての属性を帯びているのである。

国家のまなざしは、どのように歴史の資源化に作用しているのか。この点の研究は端緒についたばかりである。例えば、民族英雄ひとつをとりあげても、今後比較検討していく価値がある。個々の民族英雄の事績が外部社会との関係において、どのように評価がなされていくのか。その過程は動的である。抗倭、抗英、抗日などにおいて発揮される英雄的行為は、華夷秩序を守る、国境防衛に貢献するなどの意味機能を有するが、そこには「抵抗」と「犠牲」というモチーフがしばしば含まれている。刀安仁の事績が

中国社会の内外で人々に訴える力があるとすれば、資源としての有用性はこの点にも依拠しているのかもしれない。こうした問題の検討は今後の課題である。

注

- 1) 本稿にかかわる資料は、2016年8月20日から8月24日にかけて徳宏タイ族自治州での現地調査において収集した。本文中の写真もその時に撮影したものである。
- 2) 民国期には土司の存廃が議論された。1944年から1948年において、徳宏タイ族土司は三回の会議を開いた。改土帰流に反対することが目的であった。土司はイギリスの力を借りて土司制度を維持しようとしたのである。これに対し、民国政府はイギリスの干渉を退け、この問題を内政問題として扱った。調査を実施し、土司制度を廃止しようとしたが、最終的には土司を存続させた [王春橋 2015]。
- 3) 民国11 (1922) 年の干崖行政委員政区での調査によれば、同行政区は32,741人の総人口を擁した。しかし、この数字は戸撒土司地区を含んでいたため、その人口8,000人を引いた24,714人が干崖土司の人口である。1950年の統計によれば、総戸数7,740戸、36,888人である。タイ族は22,133人、漢族は7,378人である。その他はジンポー族、リス族、ドアン族などである [吳志湘・王清永 1997: 134-135]。
- 4) 「刀安仁專頁」- 中国民族図書館 <http://www.celib.cn/zt2/index.aspx> を参照 (2016年12月25日閲覧)。雲南の辛亥革命100周年の記念活動については、以下のウェブサイトがある。 <http://www.yn.chinanews.com/pub/special/xhgm/> (2016年12月25日閲覧)。
- 5) こうした評価はすでに1960年代に示されている [中国科学院民族研究所・雲南少数民族社会歴史調査組 (編) 1964: 74-75]。徳宏タイ族の間では卓越した英雄として長く記憶されていた。中国共産党の公定史観との間のずれの問題は他の少数民族においても類例が多くある。
- 6) 『徳宏大観』では22名の人物が挙げられている [徳宏傣族景頗族自治州人民政府 (編) 1993]。こうした人物の選定は、徳宏タイ族ジンポー族自治州人民政府が自治州成立40周年を記念する事業の一環として行ったものである。その後、徳宏地区の近代史において重要な功績を残した人物 (徳宏人物) として以下の15人を選んでいる。刀安仁 (1872-1913, タイ族・干崖土司), 李根源 (1879-1965, 漢族), 刀京版 (1899-1966, タイ族・干崖土司), 龔綬 (1891-1969, タイ族・南甸土司), 司拉山 (1921-1980, ジンポー族), 雷春国 (1923-1967, ジンポー族), 尚自貴 (1894-1974, ジンポー族), 排啓仁 (1922-1989, ジンポー族), 衍景泰 (1925-1985, タイ族・勐卯土司一族), 方克光 (1899-1953, タイ族・芒市土司一族), 多永安 (1911-1969, タイ族・隴川土司), 蒋家傑 (1914-1984, 漢族), 多永清 (1916-1971, タイ族・隴川土司一族), 趙宝賢 (1893-1946, 漢族), 楊思敬 (1917-1943, 漢族), 羅志昌 (1912-1977, 漢族)。土司もしくはその血縁者は7名である [中共徳宏州委宣传部 (編) 2013: 42-50]。
- 7) 盈江県政府が修復した。これと同時に、秦力山墓も修復されている。刀安仁墓の修復については、 <http://www.celib.cn/zt2/aboutdetails.aspx?id=47> を参照 (2016年12月25日閲覧)。
- 8) 盈江県《話説盈江》 (編) 2009『話説盈江首届刀安仁革命思想學術研討会特輯』芒市: 徳宏民族出版社。雲南省民族学会傣学研究委員会、徳宏州人民政府2010『首届刀安仁革命思想學術研討会論文集』昆明: 雲南民族出版社, 「刀安仁專頁」- 中国民族図書館 <http://www.celib.cn/zt2/index.aspx> も重要 (2016年12月25日閲覧)。

- 9) 三班とは、属官班、親兵班、吼班である。六房とは、候差房、庫房、書房、軍機房、軍装房、伏房である。辛亥革命後、刀安仁は民主革命の影響を受けて改革に取り組み、儀仗や駕、土司への跪拝を廃止、三班六房の体制も改革し、人員整理を行った〔吳志湘・王清永 1997: 138〕。施設やその配置を隴川土司、南甸土司の衙門建築と比較してみると、基本的な構成において共通している。
- 10) 主要な土司文物には、刀氏宗譜、干崖宣撫司官印（二級文物）、土司の朝服などがある。盈江県の文物資料については、〔傅于堯 1986a; 1986b; 1988〕に詳しい。
- 11) 18枚の絵画パネルのタイトルは、①美麗和平的干崖、②明時内附、受封、③清時内附、受封、④刀安仁巡視多間、⑤英殖民者之魔爪伸向我西南辺疆、⑥到处燒殺、⑦刀安仁号召各族人民反抗入侵、⑧伝信聯合景頗族、⑨利用有利地形打撃英軍、⑩利用各種弁法機智靈活的打撃英軍、⑪民衆捐款捐物、支援前線、⑫邊民爬山涉水送物資、⑬用草藥救治傷員、⑭刀安仁親臨前線指揮作戰、⑮雨中火藥受潮英軍武器失敗、⑯英軍潛逃、⑰清廷無能勒令退兵、屈膝求和、⑱刀安仁教育人們抗擊轉覆 決不能放下武器、である。
- 12) 刀安仁陵園、刀安仁故居は、愛国主義教育の實踐に活用されている。以下のウェブサイトを参照。
<http://www.yjyj.org/index.php/cms/item-view-id-1268.shtml>, <http://www.chinanews.com/qxcz/2012/03-14/3744181.shtml> (2016年12月25日閲覽)

参考文献

曹成章

1985 「傣族の民主革命先行者—刀安仁」 德宏州志編委会弁公室（編）『德宏史志資料』3: 236-241。

2010 『民主革命先驅刀安仁』北京: 中国社会科学出版社。

《傣族簡史》編写組

1986 『傣族簡史』昆明: 雲南人民出版社。

刀安鋸

2010 「試論刀安仁革命思想的形成与發展」 雲南省民族学会傣学研究委員会、德宏州人民政府『首届刀安仁革命思想學術研討會論文集』pp. 8-23, 昆明: 雲南民族出版社。

刀安祿

1985 『抗英記』芒市: 德宏民族出版社。

刀安祿・李順才・楊広生

2001 『刀安仁伝略』昆明: 雲南民族出版社。

刀安祿・楊永生

1984 『刀安仁年譜1872-1913年』芒市: 德宏民族出版社。

《德宏傣族景頗族自治州概況》編写組

1986 『德宏傣族景頗族自治州概況』芒市: 德宏民族出版社。

德宏傣族景頗族自治州人民政府（編）

1993 『德宏大観』上海: 上海文艺出版社。

俄吞

2010 「試談刀安仁的民族精神亮点」『首届刀安仁革命思想學術研討會論文集』pp. 49-54, 昆明: 雲南民族出版社。

傅于堯

- 1986a 「盈江民族歴史文物考察 (上)」 德宏州志編委会弁公室編 『德宏史志資料』 7: 120-167。
 1986b 「盈江民族歴史文物考察 (中)」 德宏州志編委会弁公室編 『德宏史志資料』 11: 155-187。
 1988 「盈江民族歴史文物考察 (下)」 德宏州志編委会弁公室編 『德宏史志資料』 11: 187-203。

何少林・白雲 (編著)

- 2012 『中国傣族』 銀川: 寧夏人民出版社。

江応樑

- 1983 『傣族史』 成都: 四川民族出版社。
 1992 「略論雲南土司制度」 『江応樑民族研究文集』 pp. 313-337, 北京: 民族出版社。

孟必光

- 2010 「刀安仁民主革命思想的形成及啓示」 『首届刀安仁革命思想學術研討會論文集』 pp. 1-23, 昆明: 雲南民族出版社。

潘先林・張黎波

- 2011 『天南電光—辛亥革命在雲南』 昆明: 雲南人民出版社。

王春橋

- 2015 「土司存廢与国家統一 (1944~1948)」 『雲南民族大学学報』 2015年第1期: 103-108。

呉志湘・王清永

- 1997 「干崖宣撫司」 中国人民政治協商会議他編 『德宏州文史資料選輯 第十輯 (德宏土司專輯)』 pp. 134-154, 芒市: 德宏民族出版社。

謝本書

- 2008 「刀安仁—近代土司的傑出代表」 雲南省民族学会傣学研究委員会, 德宏州傣学学会 (編) 『雲南傣族土司研究論文集』 pp. 434-446。

盈江県 《話説盈江》 (編)

- 2009 『話説盈江首届刀安仁革命思想學術研討會特輯』 芒市: 德宏民族出版社。

雲南省民族学会傣学研究委員会・德宏州人民政府

- 2010 『首届刀安仁革命思想學術研討會論文集』 昆明: 雲南民族出版社。

張承源・方華

- 1988 『德宏風采』 昆明: 雲南人民出版社。

鄭光永

- 2009 「浅析刀安仁故居旅游景区的開發与建設」 『話説盈江首届刀安仁革命思想學術研討會特輯』 pp. 53-55。

張国龍

- 2010 「試論刀安仁精神」 雲南省民族学会傣学研究委員会, 德宏州人民政府2010 『首届刀安仁革命思想學術研討會論文集』 pp. 31-48, 昆明: 雲南民族出版社。

張明耕

- 2004 『刀安仁伝』 香港: 天馬圖書有限公司出版。

張天放

- 1985 (1981) 「辛亥革命中的傣族愛国領袖刀安仁」 德宏州志編委会弁公室 (編) 『德宏史志資料』 3: 233-235。

中国科学院民族研究所・雲南少数民族社会歴史調査組 (編)

- 1964 『傣族簡史簡志合編 (初稿)』 北京: 中国科学院民族研究所。

中共德宏州委宣傳部（編）

2013 『有一個美麗的地方——德宏』 芒市：德宏民族出版社。

中國人民政治協商會議他（編）

1997 『德宏州文史資料選輯 第十輯（德宏土司專輯）』 芒市：德宏民族出版社。